

すみだ子育て・子育て応援宣言シンポジウム
(次世代育成支援後期行動計画)
「子育てを支える地域のつながり」

1. 日時 平成 21 年 12 月 13 日(日) 午前 10 時から正午まで
2. 場所 すみだリバーサイドホール
3. 内容
 - (1) 開会あいさつ 墨田区長 山崎 昇
 - (2) 次世代育成支援後期行動計画「中間のまとめ」
策定報告 子育て支援担当部長 鈴木陽子
 - (3) 基調講演「地域に求められる架け橋」
講師 関東学院大学准教授 澁谷昌史氏
 - (4) パネルディスカッション「子育てを支える地域のつながり」
報告者 小菅崇行氏(小菅株式会社代表取締役社長)
雁部隆治氏(墨田区立小学校PTA協議会 会長)
上野悦子氏(墨田区次世代育成支援行動計画推進協議会公募委員)
コーディネーター 布施英雄氏(財団法人 共愛館理事長)
 - (5) 閉会

シンポジウム内容

- (1) 開会あいさつ 墨田区長 山崎 昇

今日は早朝より、またお寒い中、シンポジウムにご出席いただきありがとうございます。

我が国は少子化に歯止めがかからない状況が続いています。子どもをめぐる環境が厳しい中で、子どもをどのように健やかに育むかが重要な課題となっています。

墨田区では、平成 17 年に、次世代育成支援行動計画を策定しました。この計画は 10 年計画で、来年 3 月が前期 5 年の到達点となります。そこで、今後どうするかについて、日ごろから子育てにかかわっていらっしゃる地域の関係機関の皆様、公募の区民の方による推進協議会を立ち上げ、今年の春から熱心にご協議をいただきました。そして中間の報告をまとめていただきましたので、今日は、そのお話をさせていただきたいと思います。

子育てにおいては、なんといっても家庭の力が大変大きいと思っています。そこでここに来ていらっしゃるお母様方、お父様方をお願いをしたいのは、ぜひ、自分の子どもだけでなく、子どもは地域、社会の宝だという認識をしていただき、社会を担う人として育てていただきたいということです。これからのシンポジウムの話もヒントにさせていただきたいと思いますが、何とんでも、一人ひとりが一生懸命に取り組むことが、地域や社会を動かす大きな力になると思いますので、どうぞよろしくお願いします。

また、墨田区は保育所の待機児童が多く、この解消が喫緊の課題となっています。入所

を希望しているお子さんすべてが入所できるように施設整備に取り組んでいきたいと考えておりますので、ご支援、ご理解のほどお願いを申し上げます。

(2) 次世代育成支援行動計画「中間のまとめ」

～ 子育て支援担当部長より、策定報告 ～ (「中間のまとめ」をご覧ください。)

(3) 基調講演「地域に求められる架け橋」 関東学院大学准教授 澁谷昌史氏

みなさん、おはようございます。現在、墨田区次世代育成支援行動計画推進協議会で墨田区のことをうかがいながら、汗をかかせていただいている澁谷と申します。今日は、お話をさせていただくうえで、2つお約束をしておきたいと思います。ひとつは、早口になってしまうので、わからない場合はぜひ止めてください。もうひとつは、私は普段は虐待の話をする事が多く、どちらかという暗い話なのですが、今日はできるだけ明るくいきたいと思います。

今日ご参加の方々の中にも、地域の会議などに参加する方が多くいらっしゃると思うのですが、会議が問題点を出す場になっていることが多いのではないのでしょうか。問題を出したり、悩んでいることを出し合うことができると、確かにすっきりとすると思うのですが、では、「どうしていいか」というときに、問題点を指摘するだけでは役には立ちません。空気が淀んでしまっておしまいになってしまうこともあると思います。

今日は、少子化という問題に関係する話題ではありますが、2時間のシンポジウムの後には、こんな思いをもっている住民、お父さん、お母さん、子どもがいるんだ、ということに気づきながら、それに対して何ができるのか、ということにスポットがあたるように話を進めていくことができればと思っています。

私は、関東学院大学というところに勤めています。ラグビーや箱根駅伝など、スポーツで聞いたことがある方が多いかもしれません。ここからは都営浅草線で一本、1時間位で行くことができますので、距離はありますが、時間的には近いところにあります。さて、横浜と聞くとどんなまちを思い浮かべるでしょうか。中華街、サッカーの横浜F・マリノスやズーラシア、こどもの国、歴史では鎌倉時代に栄えたので称名寺など、あるいは西洋文化にふれたまち、ウォーターフロントの近代的なまちというイメージをお持ちなのではないかと思います。

では、すみだはどんなまちでしょうか？すみだの特徴としてイメージしやすいのは、相撲に代表される江戸の華やかな文化、伝統的な職人さんが多くものをつくる技術が受け継がれているまち、人のふれあいがあるまち、といったことではないかと思います。電車で1時間くらいの範囲でも、だいぶ違ってきますね。地域のことを考えるときには、このように、まちもいろいろだという視点が大事だと思います。

また、そこに住んでいる人々の考え方、感じ方、こういう暮らしをしたいという夢も、地域や土地がつくっているという点も重要だと思います。例えば、関東学院大学は横浜に2か所のキャンパスがあります。1つは海沿いでにぎやかなところで、もう1つは山の上

です。同じ関東学院大学ですが、学生さんの雰囲気は全然違います。入学してくるときにはそんなに変わらないと思うのですが、海沿いのキャンパスの方は人の動きが横に縦に激しく、学生さんはドライで、おしゃれな感じがします。一方、山の上のキャンパスは、周辺に喫茶店も遊びに行くところもないので、食堂がたまり場で、1,000人以上学生がいるのにみんなと顔見知り、学生さんは温かい、気さくだという評判です。なぜこうも違うのでしょうか？ どういう地域の中で暮らしているのかが、そこにいる人たちの考え方、感じ方、行動のしかたに大きな影響を与えているのだと思います。すみだでは区役所の職員が「お母さん、じゃあね」といっても問題にならないと思いますが、そのような対応は失礼だと感じ、問題だとして裁判になってしまう地域もあるのです。地域ごとに「地域の顔つき」があるので、それに合わせたプランをつくらないといけないと思うのですが、今の時代、地域がどんどん変わってきているので、まちをどうしていこうかと考えるときに、課題のひとつになってくると思います。

私は静岡県で育ちましたが、小さいころは道が遊び場で、クワガタをとりに行ったり、河原でも石投げをしたりして遊びました。しかし、私が子ども時代に楽しんできたそうした体験を、今の子どもたちは楽しむことができなくなっています。今の子どもたちは、たくましくまちで遊んでいるのですが、同じ体験をさせてあげることができず、寂しい気がします。すみだでも同じようなことが起こっているのではないのでしょうか。高層ビルに住む人が多くなっていますが、これまでのように、すみだっこがすみだのよさを実感しながらまちを引き継いでいくのではなく、新しいまちに新しい人が入ってきて新しい暮らしを始める、そんな時代になってきたということを、しっかりとみななければいけない現実としてあるのではないかと思います。

そうした中で、子育てについても様子が変わってきています。例えば、ご周知のように核家族があたりまえです。墨田区の乳幼児がいる家庭は90%、小学生のいる家庭では85%が核家族です。言い換えると、何かあったときに支援の手がかけられない家庭がほとんどということです。ひとり親家庭も多くなっています。また、全国的なデータでは、1年間に結婚したカップルの4組に1組は再婚家庭ですし、20組に1組は国際結婚、東京では10組に1組という状況です。

地域とともに家族も変わってきているので、三丁目の夕日の時代とは違って、隣の家族はうちの家族と同じという感覚は通用しません。言い換えると、うちの生活課題と隣のうちの生活課題とは別のものであるのです。これも、地域で何が起きているか、というときに、考えなければいけない大きな状況だと思います。また、家族の形が変わるだけでなく、ライフスタイルも変わってきていて、国の調査結果によると、理想の子ども数、予定の子ども数ともわずかながら減少傾向にあります。さらには結婚願望も減りつつあり、家族そのものが成立しにくい状況が、現実のものとして迫っていると言えると思います。

ではどうすればいいのでしょうか。家庭、地域の暮らしむきが変わっている中で、社会と一人ひとりの人をつないでいく試みが大事になってくると思います。ひとりで生活することは難しく、孤立することは、子どもを育てるうえでは決してプラスには働きません。で

すので、ひとりの時間を大事にすることも大事ですが、暮らしに必要なものが身のまわりで手に入らない状況が出てきたときに、いかにその家庭とまわりの社会、必要とするサービス・制度・施策をつないでいくかが大事になってくると思います。

どんなつなぎ方が考えられるでしょうか。例えば、当時者がつないでいくことが考えられます。海外では日本人が多いコミュニティでは、現地の言葉のわかる日本人の援助職、ソーシャルワーカーが架け橋になり、日本的なやり方で問題を解決しようとしています。あるいは、自分たちが暮らしている同じ立場の人から、いろいろな動きが出てくることも大事だと思います。例えば、ママ友たち同士で子育てをするうえで便利・必要なサービスをつなぐツールをつくったり、子育てが一段落したお母さんなどが NPO を立ち上げて相談を受けるなどして、困っているお父さん、お母さんが必要とするサービス・資源へのつなぎ役・架け橋になることも考えられます。また、協議会では、お父さんの役割も大事という話の中で、おやじの会ががんばっているという話が出ました。家庭とのかかわり方をお父さん同士で考えたり、地域でお父さんが役割を果たすうえでおやじの会が中核になったりと、父親と家庭、父親と地域との関係を取り戻す試みが広がりつつある、これも架け橋のひとつだと思います。

ほかにどんな架け橋が必要なのか、これから後半、すみだの実情もうかがいながら、こんなこともできるのではないかと、といったことを考えていけたらと思います。

(4) パネルディスカッション「子育てを支える地域のつながり」

コーディネーター：早朝からお集まりいただきありがとうございます。今回作成した後期行動計画は、区長のもと、子育て支援担当で行政計画として策定されました。行政計画ですので、通常は庁内の作業部会が案をつくり、官民合同の協議会が承認するという形をとるのですが、墨田区では、子育てにかかわる団体・施設の代表の方、区民の方による住民側の協議会が主体になって策定を進めたものです。そして、庁舎内の関係部署で構成されるワーキンググループがこれを側面から支援をして、計画を細かく再検討しながら、分科会で何度も検討を重ねてできあがったものです。昼も夜も検討に参加をしてくださった委員のみなさんに感謝をしたいと思いますし、区側の世話役である子育て計画課の課長、ご担当者の方にも感謝を申し上げたいと思います。

さて、次世代というのは、墨田区の子ども全部という意味だと受け止めていただきたいと思います。この子どもたちは、私たちの明日の社会を担う子どもたちです。私たち委員はみな、他人事ではなく自分たちの問題として計画の策定に取り組みました。そして子育て、子どもたちの育ちに重くかかわる問題を取り上げ、当事者としての願いを大切にしながら解決策を探ってきました。現段階では必ずしも明快な方策をつくるのが難しいものもありました。逆に民間の自発的・創造的な取り組みに感激したこともありました。小さいけれども、こうした取り組みが広がればいいなと思い策定を進めてきました。

このシンポジウムでは、行動計画を紹介するだけでなく、みなさんといっしょに計画をどう進めたらよいかを考えたいと願っています。そこで、行政に依存するのではなく、幅

広い市民活動がさかんになることを期待して、現行の制度や社会の現状の改善にむけて、住民の中から創造的に取り組んでいる事例をご紹介しますと思います。

小菅氏：私は地元のすみだの商工会議所から協議会に参画しています。個人的にも、東向島で地元の産業であるゴムや樹脂に関係する商社をしています。また、地元で育ち、子どもを地元で育てた経験があります。まず冒頭で商工会議所の活動の経緯、今年の活動の紹介をしたいと思います。商工会議所は全国ネットで、日本商工会議所があり、平成 15 年ころから、次世代の教育再生に関してさまざまな活動が全国展開されてきました。平成 18 年には教育基本法の早期改正の要望をしたり、平成 19 年には、子どものキャリア教育を中心に企業・産業界が協力することはできないかということで 1 年ほど議論をして、平成 20 年に全国で事例研究をしてとりまとめをしました。

これを受けて、すみだでは今年度、区内の学校や保護者への支援を行うすみだ教育支援ネットワーク事業と、会員企業の従業員の啓発を目的とする保護者従業員支援モデル事業という 2 本の柱をもとに、教育支援プログラムをスタートしました。現在は、会員中 52 社に登録をしていただき、教育委員会と連携をして、いろいろな形で活動をしています。企業により取り組みは違いますが、教育支援ネットワーク事業は、児童・生徒・学生への支援と、学校・教職員・保護者への支援の二本立てのプログラムを準備しようと取り組んでいます。児童・生徒・学生への支援については、職場訪問・見学、インターンシップ、マナー講習、話し方教室や、高校生には入社試験の模擬面接をやってみたらどうかなど、考えています。その延長で企業施設の開放、奨学金も議論していて、具体的になっていけばいいと思っています。学校・教職員・保護者への支援については、企業体験、研修は教職員むけにもいいと思っています。また、教職員の採用面接で面接官をしたり、PTA の研修会におじゃまをしたり、教材や器材の貸与・寄贈など、地域に密着した支援ができればいいということでスタートをした、というところです。

コーディネーター：ご存知のようにワーク・ライフ・バランスということで、職場と家庭をどう両立して子育てをするかが課題となっています。すみだは中小企業が多く、子育て優先の企業を求めても無理がありますが、すみだで働くことに子どもが夢をもてるような職場づくりはありうると思います。こうしたいくつかの取り組みを重ねることでワーク・ライフ・バランスへの道を開いていこうということで、いろいろな取り組みをしている小菅さんでした。

では次に、学級崩壊などがいわれる中、学校だけの力で本当によい子育て、教育ができるかは疑問があるわけです。その点を踏まえて墨田区立小学校 P T A 協議会会長の雁部さんからお話いただきます。

雁部氏：墨田区小学校 P T A 協議会会長の雁部です。今日は、区内に 26 校ある小学校の話を中心にしたいと思います。昔から、小学校では学校行事以外に、PTA 主催の行事をた

くさん行って、学校によって違いますが、子どもまつり、もちつき、売店やバザーなど、子どもも大人も楽しめるものを開催しています。開催にあたって担任の先生、保護者のみなさんがいっしょになってイベントを盛り上げている学校もあります。また、地域の方々の協力も欠かせないものとなっていて、バザー品などたくさん提供していただいています。運営や売店は、町会の児童会、子ども会、地域のスポーツクラブ、おやじの会などにも協力していただいています。その他、各地区の青少年育成委員のみなさん、青少年委員のみなさんによるゲームを開催していただいたり、町会の老人会のみなさんには昔遊びを子どもに教えていただいたりしています。学校・家庭・地域のつながりが、イベントによって自然にできあがっているのではないかと思います。

イベントのほかに、各学校 PTA に専門部があり、子どもみまもり隊、パトロール隊、子ども 110 番などの取り組みもしています。いろいろな取り組みがありますが、これは今に始まったものではなく何十年も続いているものです。学校を主体として、地域とのつながりは自然にできあがっていると思います。今後もイベントなどを通して、地域、学校の先生と協力して子どもを育てる環境をつくっていきたいと思っています。

コーディネーター：学校教育は、授業をしっかりやればすむという問題ではありません。なお塾にも通う子どもの姿もあるわけで、そういう姿は、学校生活をしていくうえで、あるいは子どもが成長していくうえでプラスになっているかという、必ずしもそうではありません。逆にいろいろなスポーツ、子どもが夢中になるような取り組みを重ねることで、子どものもっている能力が啓発されることは多々あると思います。ですから、学校を背景に子どもがどう育つかを考えたときに、学校だけでなく、区民のみなさんの働きかけ、学校との連携・協力が大事だと思います。

では次に、上野さんから子育てをする親の代表としてご意見をうかがいたいと思います。

上野氏：亀沢 4 丁目に住んでいる上野です。現在、2 歳になる子どもがいます。私は今、墨田区内でおむつを替えや授乳ができる場所を記した地図をつくっています。それは、自分の子どもが 3 ~ 4 か月のころ、おむつ替えや授乳ができる場所がわからなくて、またないこともあり、だんだん家を出るのがおっくうになったり、行く場所が限られてしまったという悩みを抱えました。6 か月くらいになったときに、児童館でママ友に知り合い、相談したところ、みなさん、同じような悩みを抱えていることを知り、自分でできることはないかと考えました。子どもが 1 歳を超えたころに、墨田区報で、区民活動推進課、わがまち委員会、八広はなみずき児童館が協働でまちと子育てについての連続講座を開催するという記事を見つけて、「これだ！」と思い通い出しました。そこで知り合った人に、そういう地図があれば、母親ももっと外に出られるのではないかと話したところ、すぐ賛同してくれる方が集まってくださり、今は地図をつくる活動に移っています。最初は何から始めればいいのかもわからなかったのですが、今では子育て計画課の方も応援してくれて、少しずつ実現に近づいているところです。ただ、実際作業に入ってみると思った以上に難し

く、地域の協力なしにはできないことなので、こちら側もつたない面がありますが、今後
もご協力をお願いいたします。

もうひとつ、別の活動についてもご紹介します。これは私が企画をただけで、実際の
運営は近所のお母さん方がしてくださっている、町内会での親子夕食会というものです。
マンションの下での赤ちゃんを抱えたお母さん同士の立ち話から始まったものです。今、
離乳期のお子さんの夕食の時間にお父さんが家に帰って来られる家庭はあまりないんです。
毎晩まだ話せない子どもとふたりの夕食は寂しいということから、「月に 1 回でもみんな
で集まってご飯を食べよう」ということで始めた会です。場所やどのように人を誘うかな
ど、問題はたくさんありますが、今のところ、町会長さんが応援をしてくださり、なんと
か運営ができています。最初のころは話せなかった子どもが、今ではかたことを話したり、
おっぱいを飲んでいた赤ちゃんがよちよち歩きになっていて、寂しかったはずの夕食が、
町内会がひとつの家族のような楽しい活動になっています。私たち自身も、庁内会館を借
りているということもあって地域に目がむき、地域のクリーン作戦に小さい子ども連れの
親子が参加するようになったりして、こういう活動がいろいろな町会で広がっていくと楽
しいのではないかと思います。

コーディネーター：壇上の 3 人の中には、幼稚園、保育園等の施設や子育て支援サー
ビスにかかわっている方はいません。今ある施設や行政の取り組みは行動計画の基盤になっ
ていますが、それだけでは次世代の育成にむけての取り組みが充実しているとはいえないと
思います。

アメリカの政治学者の帕特ナムという人が、ボーリング・アローンという本を書きまし
た。昔はみんなでわいわいボーリングをしていましたが、最近はひとりでボーリングをし
ている状態だというものです。これが何を意味するかを政治的にみると、いくら行政がい
い施策をしても、人がばらばらに動いていたのでは効果はあがらないことを示しています。
制度、サービスを活かすのは人のつながりで、住民のみなさんの働き、協力、結びつきが
大事だということです。

では、みなさんの中から、こういうことが気になるということがあったら、手をあげて
いただきたいと思います。あるいは、施設関係の方で、こういう点についてもわかってほ
しいということがあったら、手をあげてください。

みなさんが意見をまとめている間、澁谷先生、今までの流れからお考えいただいたこと
をコメントしていただければと思います。

澁谷氏：お三方のお話を聞いていると、やはり、小さくてもいろいろな取り組みがあるな
と実感しました。布施先生からもつながり、結びつき、ということがいわれましたが、そ
れが今の時代のひとつのテーマだと感じます。もちろん必要に応じて新しいサービスをつ
くることも大事ですが、今あるものを結びつけたら 1 + 1 が 4 や 5 になる可能性もあるの
で、そういう点にもっと関心をもっていかなければいけないという気がしました。企業と
学校の結びつき、学校と地域の結びつき、お母さんと地域の結びつきの事例がありました

が、実際に取り組むのは大変だと思います。上野さんだからできるのでは、と思われる方もいらっしゃると思いますが、やることに価値があるので、そういう輪を広げることが大事だと思います。また、担い手を支える、応援する輪をつくることも大事です。例えば、現在、保育所にカウンセラー等が巡回相談をしていると思いますが、これももっと発展させて、支援チームのメンバーに学校の先生が加わって、どんなことが起こっているのかいっしょに考えるといった取り組みがあってもいいと思います。学校のことは学校、家庭のことは家庭で考える、というのがこれまでのやり方だったと思いますが、そこに、学校の先生や町会長、民生委員なども加わった支援チームをつくること、その中で担い手をサポートするさらなる輪をつくる試みが、結びつきを増やす中で必要なのでは、と考えました。

他の取り組みも知りたいので、ぜひフロアから発言していただければと思います。

会場より：小菅さんに質問です。教育支援プログラムは教育委員会と協力して実施しているということでしたが、どういう結びつきでプログラムが実現したのか、もう少し詳しく教えてください。

小菅氏：日本商工会議所の動きの中で、すみだでもいろいろなケーススタディをしたのですが、その中で、地域の教育委員会と協力するのがいいのでは、ということで協力しています。9月には、教育委員会の要請で文花中学校で講師をし、とてもいい経験になりました。その場でいろいろな方との出会い、つながりができたので、これをきっかけとして、これからさらに取り組みが広がっていくのではと思っています。

会場より：教育委員会との連携が生まれたきっかけは、どのようなものだったのですか？

小菅氏：教育支援プログラムを立ち上げるときのメンバーに教育委員会のメンバーがいて、そこからつながりができてきた、という経緯です。

会場より：地域には、価値観が違うさまざまな人がいますが、そこをまとめる中での苦労、あるいはこんな風に解決したということがあったら、教えてください。

雁部氏：私自身が町会の役員をしていて、老人会の方と親しくしており、小梅小学校で子どもまつりがあったときに、地域に協力してほしいということで老人会に声かけをしたら、快く引き受けてもらえました。現在では、学校独自でも老人会に来てもらったりしているようです。ちょっとした人脈を活かして、どうですか？という声かけをすることが大事だと思います。

会場より：澁谷先生に質問です。父親の立場から、父親同士の架け橋としてどういう実例があるのか、またモデルになるようなものがあれば教えていただきたいです。

澁谷氏：子どもにとって不適切な養育はどこ家庭でも起こりうるといわれています。なぜ起こるのかというと、やはり架け橋がないというか、自分ひとりで考えていて、実感としてつらさをわかってくれる人がいない、という思いが重なる中で、つい手がでてしまうとか、子どもをみるのが嫌になるということ起こりうるわけです。その中でどういう架け橋が考えられるでしょうか。おせっかいが必要というのが共通認識です。家庭に口出しするのははばかれると思われるかもしれませんが、子どもが生まれた家庭に、こういう便利なサービスや支援がありますよ、という情報などを運ぶ取り組みがあり、国でも墨田区でも事業化されています。子どもが生まれてからいっしょに走ってくれる人がいることが必要だと思います。

お父さんの役割をどう発揮していくかですが、かかわる時間が限られていて、お父さんにはどうしようもない部分があるのでそう簡単ではないです。わかってはいるけれども動きにくい実情があると思います。ですが、かかわりというのは時間の長さだけが問題になるわけではありません。週末はサポートするよ、ということを伝えていくことが大事です。また、子育てはお母さんひとりが抱えきれるものではないので、お母さんと話す時間を増やしていくということも大事な取り組みだと思います。地域のクラブ活動などで力を発揮する、つなぎ役をしていくということも考えられると思います。

コーディネーター：ありがとうございます。残り時間も少なくなったので、3人の方にこれからどういう取り組みをしたいか、みなさんにどういう協力をしてほしいかをご発言いただければと思います。

小菅氏：大企業では子育てと仕事の両立支援プログラムが進められていますが、区内は大企業が少なく、中小企業は余裕がないので進んでいないのが現状です。現在、52社の登録があっという動き始めていますが、私の小さいころのように、工場の工員さんが話をしてくれたり、端材をくれてそれで遊ぶというような、下町らしい、子どもとのつながりがあるといいと思います。ですので、大上段にかまえた支援プログラムではなく、職業体験もクラス単位より、3～4人で事業所に行っておやじさんの話を聞く、というな取り組みを積み重ねていくことができればいいと思っています。みなさんからご意見をいただいて、すみだにあった支援プログラムをつくっていきたいと思いますので、よろしくお願いします。

雁部氏：墨田区には中学校が12校あり、昨日、小学校と中学校のPTA会長が集まって情報交換をしました。こうした機会も積極的に増やして、子どものために何ができるかを話し合っていきたいと考えています。

また、現在、幼小中高の一貫教育が提唱されていますが、未就学児が1年生になったときの問題や、小学校6年生が中学校1年生になったときの問題がとりあげられています。その解決にむけて、中学校の授業を小学校の先生が見学して情報交換をする、逆に、中学

校の先生が小学校の授業をみて情報交換をするという取り組みをしています。未就学児については、小梅小学校の事例ですが、近くの幼稚園の年長児を招待して1年生と遊びをふくめた交流をしています。また、1年生が幼稚園に行って交流するということもやっており、今後は保育園とも交流ができればと思っています。お互いに交流をして、現状を知ることが第一歩だと思います。

上野氏：マップについては、できあがって必要としているお母さんの手に届くといいというのが第一ですが、同時に、そういうマップは必要ない人にもマップの存在が知れ渡ることと、そういうものがないと外に出にくくなっているお母さんがたくさんいるということを知ってもらえる社会になるといいと思っています。

食事会では、お父さんは参加してもいいのか、ということが話題になりました。ひとり親の方や、義理のお母さんや旦那さんのことを話したいという方もいるので、最初はお母さん限定にしようという話だったのですが、ある人の提案で、お父さんの参加をゴールにすることにしました。会が始まる時間は6時半で、たいていのお父さんは参加できないので、お父さんも食事会に参加して、町内会の子どもたちみんなといっしょにご飯を食べるということをめざしています。

コーディネーター：墨田区の行動計画は素晴らしいものであると誇りに思っています。現段階では完璧な計画ができているわけではなく、宿題はたくさんありますが、大事なところを抑えています。また、中間のまとめ「第5章 計画の推進にむけて」の中で、これからは区だけでなく、さまざまな団体・機関が連携・協働しながら課題に取り組んでいくことをうたっています。例えば、学校の問題、町会の体制など、細かいテーマごとに推進分科会を設置し、幅広い関係者を集めて検討し、取り組みを進めていくことで、計画を成長させていきたいと考えています。すなわち、現在掲げられている事業だけを実行すればいいということでないことを、お含みおきください。計画は行政を軸に展開されますが、区民の活動が大事であり、制度・サービス・事業の隙間を区民の協力で埋めることにより、新しい形の計画、思いが反映される計画をめざしたいと願っています。

有名なジョン・F・ケネディは大統領就任時に、この道（取り組み）が成功するか否かは、私（行政）それ以上に、みなさんの手にかかっています。あなたのために国（墨田区）が何をしてくれるかではなく、あなたがこの国（墨田区）のために何ができるかを考えようではないか、と演説をしています。まさに、そういう気持ちでいっぱいです。

行動計画をよりよくしていくために、みなさんの積極的なご協力を願いながら、パネルディスカッションを終わりたいと思います。